

## 断り表現における緩和表現の日英比較 —日英語の副詞からみたポライトネスの一考察—

荻野綾  
(関西大学大学院)

### 1. はじめに

英語を習得するためには、勿論、文法や語彙を身につけることが大前提となる。しかし、実際に英語母語話者の人々と誤解無く円滑に意思伝達を行うためにはもう1つの前提が互いに必要不可欠となる。それは語用論的知識、つまりは場面に応じた表現の適切性である。本稿では語用論的知識がきわめて重要となる<断り表現>に着目し、断りにおいて特徴的に使用される副詞を通して、日英間のポライトネス差異に対する一考察を行う。副詞の使用状況については、Ogino (2005) の質問紙調査から抽出したデータに基づいている。

対人関係を考えたとき、依頼を断るという行為は単純に No と言えば済むものではなく、表現上の工夫が求められることは想像に難くない。実際、質問紙調査から得られた断り表現を通じて、話し手が様々な配慮をしていると共に、発話に現れる些細な要素（ここでは、副詞）にも、日本語と英語で力点の置きどころに違いのあることがわかった。すなわち、断り表現に付与する緩和表現は明らかに日英語で質的な違いがあるのである。本論では、その質的相違を Brown & Levinson (1987) の face の概念に求めて、議論を展開する。

### 2. face 概念からみる言語表現の多様性

人は日々様々な言語行動を行っているが、同種の言語行動を行うにも、話し手は各場面に応じてその表現方法を様々に変化させる。その背景には Brown & Levinson (1987) によって提唱された negative/positive face が、話し手と聞き手双方の両 face が複雑に絡み合う形で、関与していると考えられる。

face とは個人が持つ社会的自我像であり、人は互いにこの face を遵守するという前提の下で日々振舞っていると考えられる。Negative face とは “the basic claim to territories, personal preserves, rights to non-distraction — i.e. to freedom of action and freedom from imposition” (Brown & Levinson, 1987:66)、つまり自分の自由を相手から拘束されたくない、自分にかかる負担を少なくしたいという欲求である。他方、positive face とは “the positive consistent self-image or ‘personality’ (crucially including the desire that this self-image be appreciated and approved of) claimed by interactants” (Brown & Levinson, 1987:66)、言い換えれば、相手から好意的に思われたいという欲求である。本論で取り上げる緩和表現は face 概念から以下のように指摘される。

- (1) By redressive action we mean action that “give face” to the addressee, that is, that attempts to counteract the potential face damage of the FTA by doing it

in such a way, or with such modifications or additions, that indicate clearly that no such face threat is intended or desired, and that S in general recognizes H's face wants and himself wants them to be achieved. Such redressive action takes one of two forms, depending on which aspect of face (negative or positive) is being stressed. (Brown & Levinson, 1987:74-75)

つまり、緩和表現は話し手が、自分の発話が相手の face に与えるであろう脅威を緩和するために用いられる。その主たる方法は、相手の negative face もしくは positive face に働きかけ、その face を重視する姿勢を表すことで、聞き手の face を脅かす意図や願望がなく、双方の face が遵守されるべきことを認識している旨を示唆することである。つまり、相手の negative face もしくは positive face を尊重することで、先に相手の face に与えた脅威を和らげることが可能となる。本論で取り上げる断り表現において言えば、断り手が相手の negative face と positive face のどちらに対して積極的に働きかけるかという差異が日英における表現の異なりを生ませるのである。

Brown & Levinson(1987) は、話し手が聞き手の face に対して行う配慮の在り様に着目し、それに応じて言語表現を 5 段階のレベル<sup>1</sup>に分類、そしてそのストラテジーを考察する。詳細は Brown & Levinson(1987) に譲るとして、本論では話し手の face も視野に入れ、話し手の「相手の face を守りたい」という欲求と「自分自身の face を守りたい」という欲求の双方に着目しながら、日英で採られた特徴的な緩和表現を用いた断り表現の背景を探る。以下、negative/positive face の問題にも触れながら、具体例を考えることにしよう。

### 3. 日英の特徴的な断り表現とその場面考察

#### 3.1 質問紙調査とその分析方法

Ogino(2005) は日本人女子大生 52 名とアメリカ人女子大生 28 名に対して、依頼に対する断り表現の質問紙調査を行った。よって、本調査結果は、あくまでも、女子大生に関する傾向である<sup>2</sup>。被験者はタテ・ヨコ関係が異なる 4 種の依頼者に対して負担度が異なる 3 種の依頼<sup>3</sup>の断り表現について自由記述することが求められた (Appendix A)。収集された断り表現は、Beebe, Takahashi & Uliss-Weltz(1990) によって提示されている断り表現における「定型意味要素」の分類表 (Appendix B<sup>4</sup>) に応じて意味要素単位に分類し、どのような意味伝達をもって断りを行う傾向にあるのか考察を行った<sup>5</sup>。定型意味要素とは、断り表現を構成する要素のことである。例えば「ごめん (謝罪)、忙しいから (理由) 無理 (能力の欠如)」という表現は、【Apology】+【Reason】+【Negative ability】という 3 つの定型意味要素から構成されていると考える。

収集された断り表現を吟味すると、そこには日英各被験者によって特徴的に用いられた表現が見受けられた。それは Reason または Negative ability という 2 つの定型意味要素に対して、日本語は「ちょっと」を、英語は “really” といった強調の副詞を、添加させたものである。これらの添加物は Beebe, Takahashi & Uliss-Weltz(1990) の分類表には記載されておらず、分類表に従えばこれらの添加物は考慮されないことになる。しかし、同じ定型意味要素であっても、これらの修飾語を付随させるか否かで、聞き手の face に

与える影響は大きく左右されることが推察される。2節でみた face 概念に、日英語の断り表現におけるこの副詞の異なりを重ね合わせると、1つのポライトネスの差異が浮び上る。断り手は依頼を断ることで依頼者の negative face を脅かすわけだが、日本語の断り表現は「ちょっと」を付与することで、相手の negative face に働きかけて、断ることで脅かす相手の face (negative face) に対する脅威の度合いを少しでも緩和しつつ、自分の positive face をも救おうとするのに対して、英語の断り表現は強調の副詞を付与することで、相手の positive face に働きかけて、断ることで相手の face (negative face) に対して与える脅威を補償しつつ、自分の positive face をも修繕しようとする意図が見え隠れするのである。

### 3.2 日英の特徴的な断り表現

Ogino(2005)では、負担度に応じた2種類の依頼(AとB)について、タテ(上下関係)・ヨコ(親疎関係)の対人関係に配慮して、(a) 母親(タテ:遠い、ヨコ:近い)、(b) 同性の親しい友達(タテ:近い、ヨコ:近い)、(c) 同性の親しくない友達(タテ:近い、ヨコ:やや遠い)、(d) 同性の先生(タテ:遠い、ヨコ:遠い)を依頼相手とした<sup>6</sup>。

A: 翌朝早く、車で駅まで送って欲しい。(比較的、負担度の低い依頼)

B: 組織の会計係を一年間引き受けて欲しい。(比較的、負担度の高い依頼)

質問紙調査では、それぞれの依頼について、相手を変えて断り表現を尋ねたところ、日英語で以下のような特徴的表現が浮かび上がってきた。

#### A. (英語)

親子関係 (a: タテ=遠、ヨコ=近)

(2) Oh, I'm sorry, but I really don't have time tomorrow.

(3) Mmm...I can't tomorrow, I'm really busy. What about dad?

(4) Mom, I will be really busy tomorrow. Could Dad take you instead?

(5) I can't. I'm too tired and I have to get ready for school. I'm sorry.

友人関係 (親密) (b: タテ=近、ヨコ=近)

(6) Sorry, but I got way too many things to do tomorrow, I just can't. Sorry!

友人関係 (疎遠) (c: タテ=近、ヨコ=遠)

(7) Well, I really can't, I'm so sorry — but maybe you could ask someone else?

(8) I'm pretty busy.

師弟関係 (d: タテ=遠、ヨコ=遠)

(9) Sorry professor, but I really can't. But, I know X has a car, so maybe you could ask them?

(10) Sorry. I really don't have time tomorrow morning.

## A. (日本語)

親子関係 (a: タテ=遠、ヨコ=近)

(11) ごめん、明日ちょっと用事あるわ。お父さんに頼んでみてくれん？

(12) 明日はちょっと無理。ごめん。

(13) やることが多すぎて、ちょっと無理や。

友人関係 (親密) (b: タテ=近、ヨコ=近)

(14) ごめん、明日の朝ちょっと忙しいんよ。

(15) ごめん、明日はちょっと無理～。ごめんねー。

(16) それはちょっとできへん。ごめんね。

友人関係 (疎遠) (c: タテ=近、ヨコ=遠)

(17) ごめんね、ちょっと朝バタバタしてて忙しいから無理なんよ。

(18) ごめんね、明日の朝忙しいから、ちょっと無理だと思う。ごめんね。

(19) ごめんね、ちょっと行けそうにないんだ。

師弟関係 (d: タテ=遠、ヨコ=遠)

(20) すみません、ちょっと明日は予定が ...。

(21) すみません。ちょっと都合がつかないんで他の人に頼んでもらっていいですか？

(22) 明日の朝は用事が入っていて、忙しいのでちょっと無理です。申し訳ないです ...。

## B. (英語)

親子関係 (a: タテ=遠、ヨコ=近)

(23) I'm really busy this year. Can't someone else do it?

(24) I really don't have the time. Plus, I live four hours away.

(25) I don't think I'm really qualified...I'd embarrass the whole family.

友人関係 (親密) (b: タテ=近、ヨコ=近)

(26) Ha Ha Ha – no thank you. Really I'd rather not be treasurer. Really.

(27) I would, but I'm gonna be really busy and we all know how irresponsible I am...

(28) Sorry, I've got too much to do. I just don't have time.

友人関係 (疎遠) (c: タテ=近、ヨコ=遠)

(29) I don't think I could do it. I've been really busy this year, and next year looks like it'll be the same.

(30) This is a really busy year for me. Sorry.

(31) Oh, I'm really sorry, but this year is going to be very busy. I don't think I can.

師弟関係 (d: タテ=遠、ヨコ=遠)

(32) I don't think I could do it. I really am not that organized and wouldn't be a good help to you.

(33) I really don't think I'm cut out for that.

(34) Sorry, I'm way too busy with classes, my job and other activities.

## B. (日本語)

親子関係 (a: タテ=遠、ヨコ=近)

該当記述なし。

友人関係 (親密) (b: タテ=近、ヨコ=近)

(35) ごめん、私ちょっと学校とかバイトとか忙しいし、夏も実家帰っちゃうから無理だと思う。

友人関係 (疎遠) (c: タテ=近、ヨコ=遠)

(36) 私にはちょっと無理やと思う。もっとしっかりした子にお願いしようよ。

(37) う～ん、会計やしたことないからなあ... 自信ないから、ちょっと... ごめんな。

師弟関係 (d: タテ=遠、ヨコ=遠)

(38) ちょっと私は引き受けることができません。

以上の例から容易に分かることは、同じ断り表現でありながら、英語では“really”を中心に陳述内容を強める語が付加されがちなのに対して、日本語では「ちょっと」のように(少なくとも表面的には)陳述の勢いを和らげる語が添えられる傾きが見られる点である。この差異を話者の心理背景から考察するにあたり、このような特徴的表現が、どのような場面において、どの程度の割合で、用いられたかを参考までにみてみよう。

### 3.3 日英の特徴的な断り表現の使用場面傾向

#### 3.3.1 日本語: [ちょっと+ Reason] と [ちょっと+ Negative ability]

Ogino (2005) において収集された日本語の特徴的な断り表現 [ちょっと+ Reason] の使用割合は依頼負担度に大きな特徴が見られ、発話の相手に対しても若干の傾向が窺える。まず負担度であるが、負担度が低い依頼 A の状況では使用割合が 34.6% であるのに対し、負担度が高い依頼 B の状況では 1.9% に過ぎなかった。次に相手 (依頼主) であるが、全体的に見ると先生 6.7%、友達 3.8 ~ 4.8%、母親 2.9% の順に使用割合が下がった。配慮の序列: 低い負担度依頼 > 高い負担度依頼

使用の頻度: 先生 (d) > 友達 (b)(c) > 母親 (a)

依頼の負担度が低く、ヨコ関係が密ではない相手に対して特に使用される傾向がある。ヨコ関係が密ではない強いタテ関係を軸にする先生に対して最も多く使用されていることから察せられることは、この表現が聞き手に配慮を示す比較的丁寧な断り表現として解されているのではないか、ということである。

次に第二の特徴的表現 [ちょっと+ Negative ability] だが、負担度の高い依頼 B (全体の 3.8%) よりも低い依頼 A (全体の 42.3%) に対して用いられるケースが多かった。相手 (依頼主) に関しては、全体的に見ると先生 7.7%、あまり親しくない友達 6.7%、親しい友達 4.8%、母親 3.8% の順に使用割合が下がった。

配慮の序列: 低い負担度依頼 > 高い負担度依頼

使用の頻度: 先生 (d) > 友達 (c) > 友達 (b) > 母親 (a)

その使用場面の傾向は [ちょっと+ Reason] の場面と近似し、負担度が低く、ヨコ関係が密ではない相手、特に強いタテ関係も含有する先生に対して使用される傾向がある。

ゆえに、この表現も相手に配慮を示す比較的丁寧な表現として認識されていると察せられる。

ここで Reason と Negative ability の関係を考えてみると、断る行為との関連性からは、「～できない (Negative ability)」 $\supset$ 「～だから (Reason)」のような包含関係が成立することの把握が重要である。つまり、「依頼に応えられない (Negative ability)」と伝える背景には、必ずその理由 (Reason) が存在するが、逆に理由 (らしきメッセージ) (Reason) を述べたからといって、それが直ちに依頼に応えられないこと (Negative ability) には結びつかないのである。「明日は朝が早いから」(理由) に対して、「だから、お願いできるの、できないの?」と問いただすことができることを考えるとよい。「だから、引き受けられない」とも取れるし、「だから、引き受けてあげる」とも解釈できるのである。したがって、「理由」を聞かされた聞き手は、それが「できないこと」の意思表示なのかどうか、文脈情報と絡めて推論しなければならない。ここでは、推論は聞き手にとって負担になり、双方にとって誤解の元にもなりかねないという認識が重要である。つまり、[ちょっと + Negative ability] を使用する背景には、「できないこと」(Negative ability) を単刀直入に伝えることで相手の負担となる推論の手間を省き、依頼に対する返答の透明性を担保させる<sup>7</sup> という配慮があるのではないかと思われる。

日本語の両表現の使用傾向から窺える注目すべき点は、以下3点である。

1. 推論を介して拒否の意味を伝える「理由」(Reason) に頼るよりも、むしろ率直に「できないこと」(Negative ability) を認めるスタイルが好まれる傾向がある。
2. 両表現共に、主に使用された相手はヨコ関係が密ではない強いタテ関係にある人物であり、相手に配慮を示す丁寧な断り表現である。
3. 両表現共に、その使用は依頼の負担度が低い場面において集中する。

### 3.3.2 英語：[強調の副詞 + Reason] と [強調の副詞 + Negative ability]

それでは、英語の特徴的な断り表現はどのようなのだろう。3.2 節から見てとれるように、Ogino (2005) で収集したデータを調査すると、断り表現には really や very など強調の副詞が現れる。まず [強調の副詞 + Reason] に焦点をあてると、負担度が低い依頼 A の状況では使用割合が 35.7% であるのに対し、負担度が高い依頼 B の状況では 78.6% であった。次に発話の相手 (依頼主) については、タテの関係を軸とする母親が 21.4%、先生が 16% であるのに対し、ヨコ関係を軸とする友達に対しては 9 ~ 10% であった。

配慮の序列：高い負担度依頼 > 低い負担度依頼

使用の頻度：母親 (a) > 先生 (d) > 友達 (b)(c)

依頼の負担度が高い場面において、特にタテ関係が存在する相手に対して、使用される傾向がある。主にタテ関係にある相手に対して使用されるということは、この表現が相手に配慮を示す比較的丁寧な断り表現として解されているのではないかと推察される。

一方、英語でみられた第二の特徴的表現 [強調の副詞 + Negative ability] の発現はどうか。その使用割合は依頼 A (軽度の負担) で 14.3%、依頼 B (やや重い負担) に至っては 3.6% に過ぎず、全体的にその使用は稀であった。発話の相手 (依頼主) を見ると、先生が 5.4%、母親とあまり親しくない友達が 1.8%、親しい友達が 0% であった。

配慮の序列：低い負担度依頼 > 高い負担度依頼

使用の頻度：先生 (d) > 母親 (a) / 友達 (c) > 友達 (b)

〔強調の副詞 + Reason〕が相対的に高い使用割合（依頼 A:35.7%、依頼 B:78.6%）であったこと、また依頼の負担度が大きいときに非常に好まれたことを考え合わせると、英語の断りにおいては「できないこと」(Negative ability) よりも「理由」(Reason) が強調される傾向があり、それは依頼負担度が高い深刻な場面であるほど顕著となるようである。

そうすると、3.3.1 でみた、「できないこと」(Negative ability) への言及を「理由」(Reason) への言及に優先させて、推論の負担をなくし、メッセージの透明性を担保した日本語における断り表現の傾向とちょうど裏返しの関係にあるのが、「理由」(Reason) への言及を「できないこと」(Negative ability) への言及に優先させたこの英語の断り表現の傾向ということになる。つまり、ここからは、「理由」から「できないこと」を相手に推論させ、間接的な形で断りのメッセージを伝える手法が英語で採られている一面が窺える。また、裏返しという意味では、程度の軽さを強調する日本語の「ちょっと」と、程度を強調する英語の“really”や“very”の間にも、同様の反転関係が見て取れる。これはどのような理由に因るものだろうか。もう少し議論を深める必要がある。

英語の両表現の使用傾向から窺える注目すべき点は、以下 3 点である。

1. 「できないこと」(Negative ability) を提示する直接的な方法よりも、推論を介して「できないこと」を伝える、即ち、婉曲的な表現として「理由」(Reason) への傾きが強い。
2. 両表現共に、主に使用された相手はタテ関係にある人物に対してであり、相手に配慮を示す丁寧な断り表現である。
3. 主に用いられた〔強調の副詞 + Reason〕の使用は依頼の負担度が高い場面において、その使用がより多くなる。

では、日英の両副詞はどのような役割なのだろうか。上記で見た使用場面の傾向を踏まえ、4 節では face 概念を通して、断り手の心理を考察した上で、両副詞の役割を探る。

#### 4. 日英の特徴的な断り表現の背景考察：face 概念を通して

##### 4.1 <断り>という言語行動に伴う話者心理

まず、<断り>という言語行動自体に焦点をあてる。熊谷&篠崎 (2006) は断りを以下のように指摘する。

- (39) 断りにおいては、意思を伝えるという行動の目的がきちんと達成されなくては意味がない。しかしその一方で、社会的な対人行動であるからには、なるべく相手の感情を害しないようにする必要もある。 (熊谷&篠崎、2006:19)

では、一般的に、断り手はどのような心的経緯をたどるのだろうか。以下、視点を face 概念にまで掘り下げ、断りという言語行動の後ろにある複雑な話者心理を、断り手と依頼者の両 face に着目して、考察を行う。

まず、断り手は断りを達成させようとする。それが断りを行う第一目的である。しか

しそれは同時に、依頼者の **negative face** を脅かす。依頼者は相手から依頼を断られることで依然として他者からの助けを要するという不都合が生じる、つまり彼／彼女自身の思いが実現しないことで、自由を拘束され負担を抱いたままとなるからである。また、それを起因として、断り手自身の **positive face** をも脅かす。断り手は依頼者の意に沿えず、依頼者の **negative face** を脅かすことによって、断り手からみると、相手（依頼者）から好意的に思われたいという自分自身の **positive face** をも自ら傷つけることになるからである。更に言えば、断りは依頼者の **positive face** をも脅かす可能性を含有する。依頼者からみると、依頼を断られることは、助けを求めている自分に対して相手が援助の手を差し伸べてくれないことを意味するため、その断られ方、もしくは聞き手である依頼者の解釈の仕方によっては、断り手が抱く自分に対する評価の低さを推論させられることになるからである。つまり、断りという行為は（断り手からみると）相手の **negative face** を脅かすことを起因として、相手と断り手双方の **face** を大きく脅かし、延いては両者の関係性に悪影響を及ぼす危険性を孕んでいるのである。ゆえに、断り手にとって、断ることで相手の **negative face** に与える脅威を考慮・緩和し、その危険性を可能な限り最小化することが、断りを行う上での第二目的となり、次の段階（緩和表現の使用）に至る。

断り手は、緩和表現を用いて、相手の **face** (**negative face**) に対して与える脅威を緩和させ、相手の感情を害さないようにする。緩和効果を有する表現を、いわば断り表現の本体に添加するのである。何故ならば、＜断る＞という行為を選択することでまずは依頼者の **negative face** を脅かしてマイナス要因が生じてはいるが、緩和表現を通して、相手の **negative face** もしくは **positive face** に働きかけて相手の **face** の尊重を示唆することはプラス要因として働くため、全体としてはプラス・マイナス＝ゼロに似た効果が期待できるからである。また、それは依頼を断ることで自ら傷つけたであろう自分自身の **positive face** を修繕する効果にもつながる。その方法において、つまりは相手の **negative face** と **positive face** のどちらに働きかけるかにおいて、日英表現で全く逆の現象が見られるのであり、そのうちの1つの現象が3節において見た断り表現に添加される副詞の差である。

## 4.2 日英両副詞の役割

### 4.2.1 英語の断りにおける強調の副詞

では、英語の断りに見られる強調表現を **face** との関係で眺めるとどういうことが言えるだろうか。興味深いことに、英語では「理由」(**Reason**)を介して「できないこと」(**Negative ability**)を推論させ、結果として引き受けられないことを伝える傾向が強かった。これは、率直に「できないこと」を伝える傾きのある日本語とは好対照である。言い換えれば、ここには単刀直入な日本語に対して、婉曲的な英語という構図が横たわっているわけで、曖昧な日本語とストレートな英語というステレオタイプに背いているところが面白い。

さて、ここで問題となるのは、その婉曲なスタイルの英語表現に用いられた強調表現の役割は何か、である。依頼を引き受けられない「理由」を強調すること、あるいは場合によっては「できないこと」を強調する裏側には、単に社交辞令としての言い訳ではなく、



「そのような制約要因さえなければ、協力を惜しまないのに」という積極的な意思が見え隠れしているように思われる。その役割は依頼者の **positive face** に対する遵守と考えられる。**positive face** を脅かすという事象は、2節でみたように、人が抱く「相手から好意的に見られたい」という欲求を脅かすことを意味する。つまり、断りを通して依頼者が「断り手は依頼を受諾できる能力を有しているにも関わらず、受諾する意思、言い換えれば、自分を助ける意思が欠如しているがために断った」という心証を抱く場合に依頼者の **positive face** は脅かされる。ゆえに、逆を言えば、断り表現を通して依頼者に「断るのは受諾意思の欠如ではなく、受諾能力の欠如が故だ」という心証を与えることは、依頼者の **positive face** を積極的に遵守し、その欲求を満たすことにつながる。断り手が「できないこと」もしくは特に「理由」を強調することは、断ることの正当性を直訴する、すなわち、受諾意思の欠如という含意を防ぎ、受諾能力の欠如を含意するものである。ゆえに、強調表現の役割は、当該の断りが断り手の意思でコントロールできる事象ではない旨を相手に含意することで、相手の **positive face** の尊重を示唆し、断ることで相手の **negative face** に与えた脅威を補償することといえる。次の **really** の使用例を通して見てみよう。

(40) Sellito: "...The vic was a young girl. Teenager. Attempted rape. ... She got away and found a uniform on patrol nearby. He checked it out but the beast was gone by then...So, can you guys run the scene?"

Sachs looked at Rhyme.

Sellito: "I know what you're going to say: that we're busy."

Rhyme: "Yep, really busy."

(*The Twelfth Card*, pp.24-25) (筆者抜粋)

依頼者は警部補である Sellito、依頼されているのは以前から警察に調査協力者として雇われている法医学者の Rhyme である。両者の関係性だが、依頼者が警部補という階級であることからタテ関係と、過去の仕事を通して形成された若干のヨコ関係が存在すると考えられる。依頼内容はレイプ未遂事件への捜査協力である。様々な証拠を集めて分析を行わなければならないため、多くの時間と労力を要する負担度が高いものと考えられる。

さて、発話であるが、Sellito は依頼を行いながらも、Rhyme らの雰囲気から “we’re busy” と断られることを予期し、それを自ら述べる。相手の発話表現を予期するには過去の類似経験が基となるため、同種のやり取りが両者の間で過去にも行われてきたことが推察できる。一方、返答を見透かされた Rhyme は、**busy** に **really** を付け加えて改めて自ら断る。注目すべきは、断り表現に「できないこと」(**Negative ability**) が含まれず「理由」(**Reason**) のみで構成されていること、断り手が今後も関係が続くであろうタテ関係を有する依頼者への返答として、**really** を添加したことである。これらは以下 2 点を示唆する。第一は、英語によるコミュニケーションにおいても、文脈に応じては、【**Reason**】を通して聞き手に＜断り＞を推論させるような、婉曲的スタイルが用いられること。第二は、**really** を「理由」(**Reason**) に添加することは、その程度と真実性を強調し、断りを通して悪影響を受ける相手（もしくは相手との関係性）を気遣いながらの断りを可能にすると

いうことである。これは、自分ではコントロールできない受諾能力の欠如を断りの全面に出すことで、相手の **positive face** 遵守を含意し、断ることで相手の **negative face** に与える脅威を補償するがゆえであろう。以下、3.3.2 でみた〔強調の副詞 + Reason〕と〔強調の副詞 + Negative ability〕の使用場面の傾向を加え、強調の副詞の役割を総合的に考察する。

強調の副詞を用いて、「理由」(Reason) であれ「できないこと」(Negative ability) であれ、その程度の強さを相手に訴えることは、face の観点から以下の役割を有する。断り手が置かれた「物理的に依頼を受諾できない」立場、言い換えれば、客観的事実に言及することの一義的な役割は、依頼主の **positive face** を遵守することで相手の face を脅かす意図や願望がない旨を含意することである。つまり、依頼主の **positive face** を際立たせることによって、断ることで相手の **negative face** に対して与える脅かしを補償する。更に、二義的な役割として2つの効能が期待される。第一は、断ることで脅かされる依頼主の **negative face** に対して「本来は傷つけないのだが…」というメッセージの含意を行い、**negative face** 自体への脅かしを直接的にも和らげる。第二は、上記のように依頼主の face を尊重することによって、断ることで脅かす断り手自身の **positive face** をも修繕される。

これらの役割ゆえに、この手法は断り手が、自分の断りが聞き手（もしくは聞き手との今後の関係性）に与える悪影響を危惧する場面において使用され易くなる。その場面要因としては大きく2つが示唆される。第一はタテ関係の存在である。ここには、親を筆頭にタテ関係にある人物に対して配慮を払うという英語圏での人間関係に関する価値観が見受けられる。第二は、負担度の高さである。負担度の高さは依頼者が助けを求める深刻度を意味することから、負担度が高い依頼場面ほど、断りの正当性を理解してもらう必要性が高くなる。「できないこと」(Negative ability) を強調することは能力欠如の訴えに止まるが、理由 (Reason) を強調することは具体的な能力欠如の訴えとなり、断りの正当性をより強く含意することが可能となる。このことが、3.3.2 でみた〔強調の副詞 + Negative ability〕に比べて〔強調の副詞 + Reason〕が著しく使用されることにつながると同時に、〔強調の副詞 + Reason〕の使用を依頼負担度の高い場面に集中させると考えられる。

#### 4.2.2 日本語の断りにおける〔ちょっと〕

3 節において、程度の軽さを強調する日本語の〔ちょっと〕と述べたが、その語彙使用は多岐に亘るため、当表現における〔ちょっと〕の役割を見極める必要がある。以下、明鏡国語辞典からの引用である。

- (41) この文章はちょっと変だ (=少し)
- (42) ちょっと読んでみよう (=軽い気持ちで)
- (43) この靴ちょっといいんじゃない? (=まあまあ)

いずれの例も、後続の述部（「変だ」、「読んでみよう」、「いい」）を直接的に修飾してい

ると考えて差し支えないだろう。つまり、両語彙の間には論理的な結び付きが認められる。しかし、例文 (11) ~ (22)、(35) ~ (38) に現れる〔ちょっと〕を同列に扱うことには無理があるように思われる。「ちょっと忙しい」や「ちょっと無理」の〔ちょっと〕は「忙しい (35)」や「無理だ (36)」を直接修飾しているだろうか。ましてや、「ちょっと ... ごめん (37)」では、修飾先が不明である。

彭 (1990) は、〔ちょっと〕が日常会話で潤滑油の役割を果たす現代日本語の枕詞としての側面も有すると指摘し、後述の語彙との間に論理的結び付きを有する (41) ~ (43) を「単純修飾」、論理的結び付きを有さないそれ以外の用法を「場面的添加」と称する。場面的添加とは本来の意味である単純修飾からの転意であり、その役割には後続の文意を「少し」の意味から転じて和らげる働き、「自分のこと (能力、適応力、都合) を誇張しないで、最低限に押さえる」(彭、1990:21) 働きなどがあるという。それは間投詞的に用いられ、会話の潤滑油の役割を果たすものと定義される。この潤滑油が欠如すると「自己中心的、傲慢、横柄、生意気な、押し付けがましいなどの悪印象を聞き手に与えがち」(1990:16) になるという。ゆえに、これは話し手の心象を指す心的意味であり、話し手の主観的視点だとされる。詳細な議論は彭 (1990) に譲るとして、断り表現に見られた〔ちょっと + Reason〕と〔ちょっと + Negative ability〕は、共にこの場面的添加に相当する。次の〔ちょっと + Negative ability〕の使用例を通して見てみよう。

(44) ところが八木から取り急ぎ依頼された、同じ取締役の小久保秘書室長は、折り返しの電話で十月一杯は難しいらしいと返事をしてきたのである。

八木：「なんとかお会いしたいんだ」

小久保：「よく伝えたんだがね」

それではもう一度うかがってみようと言った小久保の返事は、同じだった。

小久保「やはりちょっと無理だね」

(末席重役、pp.344 - 345) (筆者抜粋)

依頼者は部長の八木、依頼されているのは秘書室長の小久保である。両者の関係性だが、両者は同じ取締役という役職であることからタテ関係は無い。ヨコ関係に関しては、個人的な付き合いはなく、密ではないと考えられる。依頼内容は社長に面会ができるよう室長として取り成すことである。社長を積極的に説得することは高い負担度だが、小久保は社長に是非を問うに止まっていると思われ、その負担度はそれほど高くないと言えるだろう。

さて、発話だが、本返答は二度目の念押しとも言える断りであり、〔ちょっと〕と〔無理〕の間に論理的な結び付きは明らかに無く、場面的添加の意味以外には解釈できない。断り手の小久保は、依頼者である八木が社長による転職先への斡旋を失う窮地に立たされていることを知っているため、〔無理〕という依頼者にとってマイナスの情報を直接的に表現すること、言い換えれば、相手の **negative face** を正面から脅かすことは気が引ける行為となる。ゆえに、〔ちょっと〕を用いてマイナス情報の文意を和らげた上での断りに至るのである。以下、3.3.1 でみた〔ちょっと + Reason〕と〔ちょっと + Negative ability〕の使用場面の傾向を加え、〔ちょっと〕の役割を **face** の観点から総合的に考察する。

〔ちょっと〕を断り表現の本体である理由 (Reason) もしくは「できないこと」(Negative ability) に修飾させることは、断り手の受諾能力の欠如、つまりは依頼者の negative face を脅かすマイナスの情報の文意を和らげる。ゆえに、その役割は依頼者の negative face に与える脅威の緩和と考えられる。しかし、これはあくまでも断り手の心的意味、つまりは言語上の緩和策であり、依頼主の negative face が実質的に救済されるものではない。では、なぜ彭(1990)が指摘するように、〔ちょっと〕は後続する文意が聞き手に与える衝撃を和らげる機能を有するのだろうか。それは断り手と依頼者との共同作業であると考えられる。すなわち、断り手は、断ることで相手の negative face を脅かすわけだが、その脅かしを最小限にしたいという思いを、自分が述べる相手にとってマイナスである情報の「過小申告」に「書き換え」て発話を行う。そして、それを受けた相手は、阿吽の呼吸の如く、その書き換えを断り手の意図通りに察し、「読み換え」を行うのである。断り手が抱く「相手の negative face に対する脅威を最小限にしたい」という感情、言い換えれば、断り手自身の主観的感情を含意することの一義的な役割は、依頼者の negative face を重視する姿勢を表すことで相手の face を脅かす意図や願望がない旨を含意することである。つまり、〔ちょっと〕の添加は、依頼主の negative face を際立たせることによって、断ることで相手の negative face に対して与える脅かしを軽減する工夫<sup>8</sup>である。更に、二義的な役割として2つの効能が期待される。第一は、依頼主の negative face に対する尊重を表すことで依頼主の positive face を脅かす可能性を間接的に減少させる。第二は、上記のように依頼主の face を尊重することによって、断ることで脅かす断り手自身の positive face をも修繕される。以上のことから、後続の文意を和らげる〔ちょっと〕は依頼者の negative face に対する脅かしを緩和させると同時に、(断っても、なお好かれていたいという)断り手の positive face を守るための、いわばオブラートのような存在と見ることができる。

これらの役割ゆえに、その手法は断り手が、自分の断りが聞き手(もしくは聞き手との今後の関係性)に与える悪影響を危惧する場面において使用され易くなる。その場面要因としては大きく2つが示唆される。第一は希薄なヨコ関係の存在である。ここには、親しい関係がまだ築けていない、特にタテ関係を含む人物に対して配慮を払うという日本語圏での人間関係に関する価値観が見受けられる。第二は負担度の低さである。〔ちょっと〕は断りの明言を回避するものであるから、その使用には断り手の「心的余裕」が要すると考えられる。つまり、負担度が低い際には、断り表現をオブラートで包んで face への衝撃を緩和させるという配慮を払えるが、負担度が高い際には「確実に断らなければならない」という意識が先立って、オブラートは使用され難くなるのであろう。ゆえに、3.3.1 でみたように、〔ちょっと〕を用いた表現は依頼負担度の低い場面に集中すると考えられる。

4.2.1 でみた英語の特徴的表現の役割と上記でみた日本語の特徴的表現の役割を比較対照させると、断るという行為そのものは同じであっても、その断りを緩和させる際に着目する相手の face 先が異なる傾向が見受けられる。つまり、日本語は受諾能力の欠如を言語上は和らげることで相手の negative face を慮って表現が決定されるようにみえるのに対して、英語は受諾能力の欠如を強調することで相手の positive face を慮って表現が決

まるようである。また、〔ちょっと〕を用いた日本語の緩和表現は、断り手が依頼主に「貴方の negative face に対する脅威を最小限にしたい」という主観的感情を含意し、聞き手がそれを瞬時に察してその意を酌むという「感情」に基づくポライトネスに準じていると言えるだろう。一方、強調の副詞を用いた英語の緩和表現は、断り手が依頼主に「貴方の positive face を脅かす意図はない」という客観的事実を示すことによる、あくまでも「理」に依存したポライトネスに則っていると考えられる。

## 5. まとめ

日本語と英語を比べたとき、たとえば構造的には、修飾語と被修飾語の順序、あるいは動詞と目的語の位置関係が、それぞれ逆になっていて、お互いに、いわば「鏡像」関係にあることはよく指摘される場所である。また、否定疑問に対して、聞き手の質問に対して Yes/No のリアクションをする日本語と、あくまでも自らの立場から肯定あるいは否定のメッセージを発する英語の違いが歴然とあって、その鏡像関係が学習者を悩ませるのも周知の事実である。図 1 には、本論で取り上げた日英語の特徴的な断りの背景において、各緩和表現が果たす働きを face の観点から図示した。両者が働きかけていく face 先の違いを見たときも、相手の negative face をベースにした日本語と、相手の positive face をベースとした英語の間に、一種の鏡像関係が横たわっているとも考えられる。このような表現ベースの違いは、発想そのものの逆転現象を意味するもので、学習者の立場から、あるいはコミュニケーションの現場に立たされる者の立場から、否定疑問の場合と同様に、意識的な対応が求められる場所である。

最後に、今回 Ogino (2005) の調査から明らかになった、話し手と聞き手の人間関係の捉え方の違いについて付言しておきたい。3 節で当該表現を使用する対象となる相手の序列に触れたとき、英語では母親が優先されたのに対して、日本語では母親の優先順位が一番低かった。ここにも日英間で一種の鏡像関係が顔をのぞかせており、その背景には日英間における人間関係の捉え方の違いがあると考えられる。母親という存在は本来タテ関係を含むものであるから、アメリカ人が強調の副詞を母親に対して好んで使用したように、その face を配慮すべき存在である。しかし日本語の場合、母親に対しては、タテ関係に対する配慮が軽減、もしくは相殺される力が別に働いていると考えられるのである。日本人の対人感を、「甘え」という象徴的な概念で説明を試みる、例の有名な土居 (1971) の考え方とも一脈通じるとも言えるだろう。つまり、自分と相手とが一体感を抱く程に親密な場合、相手に対する配慮が著しく減少する<sup>9</sup>のである。日本人は断りに際して、ヨコ関係が密に存在する親しい友達に対しても直接的な表現を多用した。このことから考えて<sup>10</sup>、〔ちょっと〕が示す、日本人が抱く言い切りに対する抵抗感やためらいは、誰に対しても普遍的に強く存在するとは言いがたい。つまり、親密な間柄の人物に対してその意識は薄れる、言い換えれば、negative face への配慮は最小化するのである。そういう意味において、3 節で触れた表現使用に係る日英語の序列の違いは、断り表現を考えるうえで、本稿で明らかになった face に関わる差異とともに、しっかり理解しておく必要があるだろう。断り表現に影響を与える対人関係に対する価値観という要因の日英差異とその詳しい背景考察については、稿を改め、より広範囲な文脈に応じた包括的な考察を行いたい。

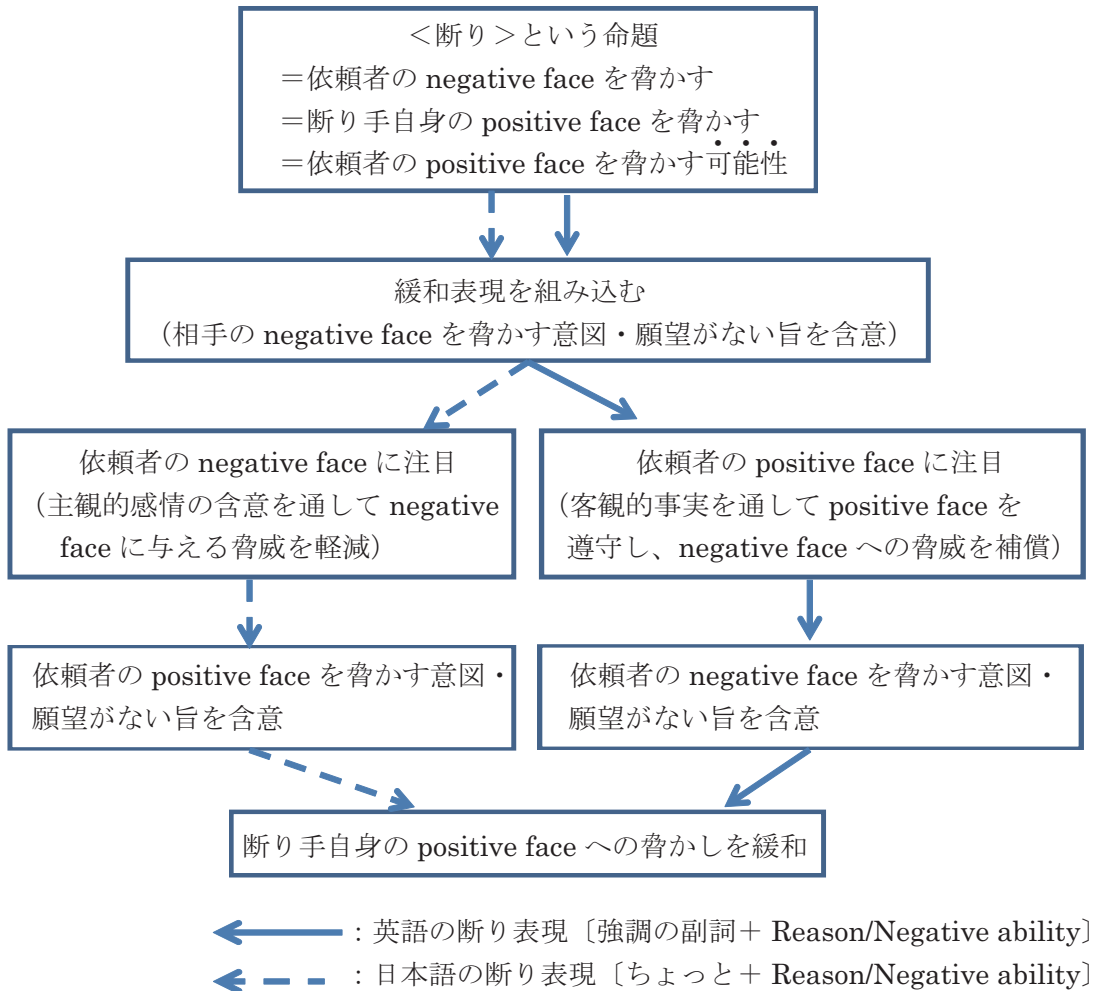


図 1. 日英の断り表現における緩和表現が果たす働き

## 註

<sup>1</sup> ① Without redressive action, baldly、② Positive politeness、③ Negative politeness、④ Off record、⑤ Don't do the FTA

<sup>2</sup> 会話スタイルは性別・年齢に応じて変動を受けるため、総合的な会話スタイルの考察を行うには、様々な年代層の男性／女性を対象に包括的な調査を行うことが今後求められる。

<sup>3</sup> 質問紙調査には負担度が大・中・小の3種の依頼を設定し、被験者にも3種答えてもらったが、分析途中で負担度が中の依頼に対する断り表現が適切に比較できないことが判明したため、実際の分析は負担度が大と小、つまり2種の依頼に対する断り表現比較となっている。本稿では、負担度が小さいものを依頼A、大きいものを依頼Bと記載している。尚、負担度は被験者に負担度が高いと思う順に番号をふってもらい、その順番の確認を取っている。

<sup>4</sup> Appendix には断りの中心的な公式のみを一部掲載。分類表の全貌は Beebe, Takahashi &

Uliss-Weltz(1990)を参照。

<sup>5</sup> 詳細な考察方法は以下3つの角度から行った。①発現割合：各意味公式が総体的にどの程度の割合で用いられるか、②発現順序：各意味公式が断り表現の何番目に発話されるか、③組み合わせ方法：断り表現をどの意味公式を用いて構成するか。詳しくはOgino (2005)参照。

<sup>6</sup> 負担の軽重をベースに、親子関係、友人関係、先生との関係を象徴的に設定し、どのような言語表現が現れるかを検証した。その場合、人間関係の微妙なダイナミズムは、関係を捉えるために、抽象化しているので、スタティックな関係に見える点は否めないだろう。

<sup>7</sup> [ちょっと]は後続の文意を和らげるオブラートのような働きだが、後続との論理的結び付きの無さ、そして語用論的知識が相成って、返答の透明性は維持されると考えられるだろう。

<sup>8</sup> 彭(1990:54)は「量少・量軽」から丁寧化を図ることは日本語の独特のものではなく、中国語、英語にも見られる」と指摘する。ただし、断り表現としては、英語には、日本語のごとく後続の述部と直接的な修飾関係を持たない、言い換えれば、後続と論理的結び付きを完全に有さない、純粋な場面的添加は見受けられない。つまり、「量少・量軽」はReasonには修飾されても((a))、Negative abilityには修飾されない((b))。それは文法的には可能であっても、語用論的にはその容認度が著しく低いと考えられる。

a) Marcus, look, I'm sorry, mate. I'm, um...a bit busy at the moment.

(アバウト・ア・ボーイ、p.129) (ボールド体は筆者による)

b) \*Marcus, look, I'm sorry, mate. I'm, um...a bit impossible at the moment.

<sup>9</sup> 詳しくは、土居健朗の『「甘え」の構造』(1971)参照。

<sup>10</sup> Ogino (2005)によると、日本人被験者が答えた直接的な意味公式を含む断り表現の最たる発話相手は母親に対してであり、次いで親しい友達であった。また、理由や謝罪等を含まない最も直接的と言える直接的な意味公式のみで構成された断り表現も母親に対して最も多く使用され、次いで親しい友達であった。これは日本人が身内である自分の家族を筆頭に、配慮や遠慮といったものが欠如することを示すものであり、親密な関係と表現の直接度が比例の関係にあることを示唆するものである。詳しくはOgino (2005)参照。

#### 参考文献

- Beebe, L., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In R. Scarcella, E. Andersen, & S. Krashen (Eds.), *Developing communicative competence in a second language* (pp.55-73). New York: Newbury House.
- Brown, P. & Levinson, S. (1987). Universals in language usage: Politeness phenomena. In E. Goody (ed.), *Questions and politeness: Strategies in social interaction* (pp.56-310). London: Cambridge University Press.
- Deaver, J. (2006). *The Twelfth Card*. New York: Simon & Schuster Inc.
- Ogino, A. (2005). *Refusing requests: Directness and Indirectness in English and Japanese*, MA thesis, Kansai University.

土居健朗 (1971) 『「甘え」の構造』 弘文堂

亀山太一 (監修) (2003) 『アバウト・ア・ボーイ』 株式会社スクリーンプレイ

熊谷智子・篠崎晃一 (2006) 「依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差」、国立国語研

究所編『言語行動における「配慮」の諸相』、pp. 19-54、くろしお出版  
 彭飛（1990）『外国人を悩ませる日本人の言語慣習に関する研究』和泉書店  
 清水一行（1989）『末席重役』光文社文庫

## 辞書

明鏡国語辞典（2003）大修館書店

日本国語大辞典第二版（2006）小学館

## Appendix A

4種の依頼者：①母親、②親しい友達、③あまり親しくない友達、④先生

3種の依頼：

依頼①：明日の朝に依頼者を車で駅まで送って行くこと

（あなたは車の免許があり、また、自分の車を持っていると想定してください。）

依頼②：依頼者を自分の部屋に一晩泊めること

（あなたは下宿生として1人暮らしをしていると想定してください。）

依頼③：依頼者からの会計役員要請を一年間引き受けること

（以下の場面を想定してください。）

(a)... あなたの家に町内組織の会計役員の順番がまわってきました。

(b) & (c)... あなたと同じサークルに所属しており、今年会計係をしていた友達が最後の仕事として次期会計役員を探さねばいけません。

(d)... 先生が大学のある組織の会長になられ、会計の仕事を手伝ってくれるような学生代表を探しています。

## Appendix B

### Classification of refusals

#### I . Direct Semantic Formula

A. Performative (e.g., “I refuse”)

B. Nonperformative statement

1. “No”

2. Negative willingness/ability (“I won’t”. “I don’t think so.”/“I can’t.”)

#### II . Indirect Semantic Formula

A. Statement of regret (e.g., “I’m sorry...”; “I feel terrible...”)

B. Wish (e.g., “I wish I could help you...”)

C. Excuse, reason, explanation

(e.g., “My children will be home that night.”; “I have a headache.”)

(Beebe, Takahashi & Uliss-Weltz, 1990 より筆者抜粋)